2 月 5 日のメッセージ

聖書：ルカによる福音書　8：　1－11

「聞く耳のある者は聞きなさい」

神が「心の拠り所」であることはわかっています。神と常に向き合いたいと思っています。神に従う一人でありたいと願っています。けれども、どうしてもその思いが持続しません。

イエスはそのような人のことを的確に譬えています。

「ほかの種は石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった。」(ルカによる福音書 8:6)

確かにイエスの言われる通りです。神の御言葉を聞き、「よし、やるぞ」と意気込んだのもつかの間、「あちらを先に、こちらを先に」と、自分の都合を優先してしまいます。厳しい局面に立たされると思わず尻込みしてしまいます。どちらも「我が身かわいさ」のゆえでしょう。

将棋の棋士、羽生善治さんの座右の銘は「運命は勇者に微笑む」。先が見通せない局面では人間、ためらってしまうものですが、羽生さんは「だからこそ行く」と踏み込み、重要な局面を打開していく。それまでの自分を棄てて、飛び込んでいく強さこそ羽生さんの勝負強さなのでしょう。

しかし、「自分を棄てる」ことの大切さをわかっていながら、それを実行できないのもまた人間なのです。ならば、自分からは思い切ることのできない者はどうすれば良いのでしょうか。

イエスはたとえ話を語られた後、「『聞く耳のある者は聞きなさい』と大声で言われた」(ルカによる福音書 8:8)。大声で言われたということが、それが大切だからです。

自分で思い切ることができないならば、まず「聞く」ことから始めよ、とイエスは言われているのではないでしょうか。自分には何も誇ることがないとわかっているなら、素直に「聞く」ことによって道は示されるのです(「心を尽くして主に信頼し、自分の分別には頼らず／常に主を覚えてあなたの道を歩け。そうすれば／主はあなたの道筋をまっすぐにしてくださる。」箴言 3:5-6)。

もっとも、聞いてすぐに結果が出たとき、すぐに聞けなくなってしまうのもまた、人間でしょう(「あなたがたは既に満足し、既に大金持ちになっており、わたしたちを抜きにして、勝手に王様になっています。」コリントの信徒への手紙一 4:8)。自分の都合が満たされれば、私たちは聞く耳を失ってしまいます(「茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快楽に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである。」ルカによる福音書 8:14)。そして、全てを献げたやもめのようではなく、一部を献げた金持ちのように振る舞ってしまうのです(「あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」ルカによる福音書 21:4)。

だから、聖書は、イエスは、神は繰り返し教え続けられます(「わが子よ、わたしの教えを忘れるな。わたしの戒めを心に納めよ。」箴言 3:1)。生涯を通して神の言葉に聞き続けた先達たちの背中を示されます(「そこで、あなたがたに勧めます。わたしに倣う者になりなさい。」コリントの信徒への手紙一 4:16)。

「主が望まれるのは主を畏れる人／主の慈しみを待ち望む人。」(詩編 147:11)

「何を今さら」と思うとき、私たちは聞く耳を失っています。自分自身に固執するようになっています。

「聞く耳のある者は聞きなさい。」

私たちは繰り返し教えられることによって、姿勢を正すことができます。躓き、起き上がることの繰り返しの中で、「実を結んでいる」ことに気づくことができます。

今日もまたそのような繰り返しの一日です。飽くことなく、倦むことなく「聞く」者であり続けたいと願います。